

二〇一〇年十二月 山陰研究 第三号 抜刷
島根大学法文学部 山陰研究センター

鱒淵寺の密教法具について

関根俊一

鰐淵寺の密教法具について

関 根 俊 一
(帝塚山大学・教授)

キーワード：鰐淵寺、密教美術、密教法具、金剛鈴、金剛杵

keywords : Gakuen-ji Temple, Esoteric Buddhist Art, Esoteric Buddhist equipment, Kongorei, Kongosyo

はじめに

密教では、「事教二相」を車の両輪の如く喩え、不二の関係を説く。すなわち、密教の法門は理論と実践とを完備し、教相を学ぶことにより理論的に覚の所在を知る。その覚を求めて実際に修行する方法規則を示すのが事相である。¹⁾そして、この実践行(修法)に不可欠な道具がいわゆる「密教法具」と呼ばれるものである。²⁾

延暦二三年(八〇六)、入唐した空海は、大同元年(八〇六)に青龍寺恵果より胎藏・金剛界・伝法阿闍梨の灌頂を受け帰国するが、その際には、經典・儀軌・曼荼羅などとともに金剛杵・金剛鈴をはじめとする法具類を請来している。それら請来品を列挙した『御請来目録』(『上新請来経目録表』)では、そうした法具類の意義について、

「所謂、金剛等は、並びに皆仏の智の法門なり。受持頂戴すれば福利極まり無し。外には以て魔群を摧滅し、内には以て煩惱を調伏す。観

智の端、茲より起る。³⁾」

と云って、金剛(金剛杵)などの法具は、仏の智慧の教説であり、それを頂けば、利益と福德は際限がない。また外から我々に襲いかかる諸悪を摧破し、我々の心中に潜む煩惱を鎮めるはたらきがあり、まさに様々なものを観察する智慧の端緒がここにあると述べ、法具類の意義を端的に説いている。つまり、金剛鈴や金剛杵は、従来の仏具類とは異なる密教独特の強い象徴性を有した道具ということとなる。

密教寺院では、平安時代以降こうした法具類が徐々に整備され、本尊や曼荼羅の宝前に設えた大壇上に配置・荘厳し、あるいは修法の際には僧侶の持物となり、万事に不可欠な道具となる。しかし、そうした法具類の現存遺品の中で、文化財的な価値を有する古品となると、数は限られ、とくに平安・鎌倉期に遡る遺例は決して多くはない。

鰐淵寺には、近世の遺例を含めて数例の密教法具遺品が伝わっているが、本稿ではとくに製作が鎌倉時代に遡ると判断され、しかも特徴的な形制を示す五鈷鈴一口を主としつつ、あわせて通形ではあるが重厚な美しさを見せる五鈷杵一口を紹介し、若干の考察を加えることとしたい。

一、金銅五鈷鈴

1、概要

一般に、金剛鈴は、手で握る把部とこの上に付ける鋒（切っ先）に当る鈷部（鈷と把をあわせて柄または杵部という場合もある）、ベルに当る鈴身部の三部より構成される（図1）。把の先端の鈷部には、鋒に代わって宝珠・塔形などを備えることもある。この鈷部の形姿や鈷の本数の相違により、鈷が一本のものを独鈷鈴、以下三鈷鈴、五鈷鈴、九鈷鈴などと称し、鈷以外のものとして宝珠鈴、塔鈴が加えられる。中核をなすのは五鈷鈴で、金剛薩埵などの菩薩像や、愛染等の明王像など多くの尊格の持物ともなっている。

次に、金剛鈴を遺品に即していくつかに分類し、それぞれに名称を付すこととする。まず把部中央に鬼目という円形や楕円形の突起を配

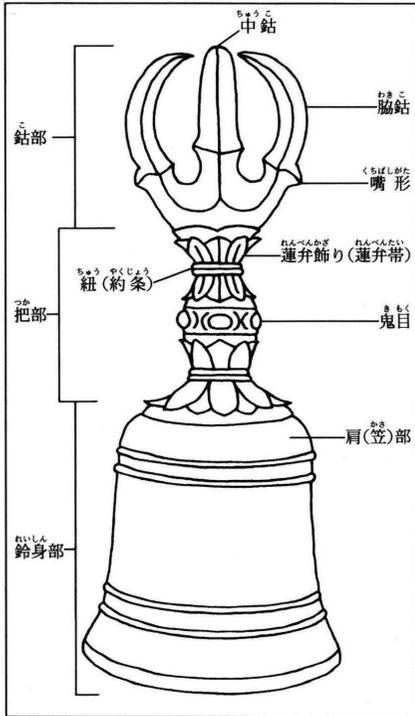


図1 金剛鈴の各部名称

するものを「鬼目式（鈴）」、鬼面と呼ぶ「瞋怒面」を配するものを「鬼面式（鈴）」と呼ぶ。次に、鈴身側面に尊格を象徴する種子（梵字）を表出したものを「種子（梵字）鈴」、同じく三昧耶形を表したものを「三昧耶鈴」と呼ぶ。さらに種子鈴には、金剛界五仏種子を表した「金剛界種子鈴」と、主に胎藏界五仏種子を示した「胎藏界種子鈴」がある。なお、鈴身側面にこうした象徴表現を持たないものを本稿では便宜的に「素文鈴」と呼ぶ。現存遺品では、鬼目式素文鈴が最も多数を占め、種子鈴や三昧耶鈴は僅少である。

考察に先立って、鰐淵寺の五鈷鈴（図2）について概要を記しておく。本品は、銅（青銅）製で鈴身部と杵部とを別鑄・接合したいわゆる鈴杵別作式の遺品で、表面は全面に鍍金（金メッキ）を施していたが、現在では永年の使用による「手擦れ」や「磨損」のため、一部に残存を認めるのみである。

形状は、鈷・把・鈴身（鈴体）の三部よりなる。鈷はいずれも断面を方形とし、中鈷は表面に匙面（凹面）を取る。中鈷と四本の脇鈷は



図2-1 金銅五鈷鈴 鰐淵寺



図 2-2 金銅五鈎鈴 (部分) 鰐淵寺

下方に一段の節を作り、脇鈎の外形はほぼ正円に近い弧線を描き、先端に向かって窄まり細く鋭利になる。脇鈎下方の節と反対面の位置には小さな窪みを入れ、基部には獅噛を備え、四本の脇鈎が獅噛の口から吐出される如く表現する。獅噛は瞋目で、齒と下出の牙を表し、タテガミを毛彫りする。把は中央四方に鬼面を配し、その上下に二本の紐で締めた蓮弁帯を飾る。鬼面は、中鈎の鈎面と同方向、つまり脇鈎と脇鈎の間に配され、いずれも瞋怒の相で、髮筋に毛彫りを施し、目を大きく見開き、への字に結んだ口には牙を表す。各面の間は綾杉文の帯で区画する。

蓮弁帯は、鬼面を挟んで上方蓮弁帯(鈎寄り)と下方蓮弁帯(鈎身寄り)では意匠が異なる。すなわち上方蓮弁帯は、間弁を入れた単弁八葉であるのに対し、下方蓮弁帯のみは、二本の素紐を挟んだ上向き蓮弁帯を、ちょうど間弁付四葉蓮弁をずらして二段に重ねた形に表し、

下向き蓮弁帯は、他と同じ間弁付単弁八葉として、いずれも弁先に蕊を刻む。
鈎身は釣鐘形で、肩からほぼ垂直に下がり、裾で強く広がって地付部に駒爪を作り出す。側面は、上・下方に連珠文と二線の突線をつくる紐帯を廻らせる。内部には露玉形で先端を八角形に面取りした舌を吊る。

ii、形姿から推す製作年代

金剛鈴の製作年代は、大きく二つの時代区分を設けて考察できる。端的にいえば「古様」と「新様」とでも理解すべきもので、前者が平安後期をピークに鎌倉初頭に至る遺品群、後者が鎌倉半ばから南北朝頃をピークとする遺品群である。金剛鈴や金剛杵の遺品は、制作年代の判断に有効な紀年銘品などの基準作例が極めて僅少であり、これをさらに絞って製作時期を限定してゆく作業は困難な状況である。

「古様」な遺品群は、主に空海請来遺品(東寺現存)を劈頭に、製作年代の比定可能な経塚伴出品などを根拠にして導き出されたもので、概ね次の①群のような細部の特徴を見せる。これに対し時代が降ると、②群のような「新様」の特徴が徐々に現れて来る。

- 1 ①鈎先が鋭利で、武器本来のかたちを留める ↓ ②鋭利さが減じる
- 2 ①中鈎の先端が脇鈎のそれより長い(中鈎の先端が突出する) ↓ ②中鈎と脇鈎の長さがほぼ等しくなる
- 3 ①鈎(とくに中鈎)に匙面を取る ↓ ②鈎の匙面がなくなる
- 4 ①脇鈎の横張が大きく円形に近い弧線を描く ↓ ②脇鈎が横に張ってから急激に窄まる、牛角形を呈する

- 5 ㉑ 鈷部が把部に比して長い、もしくはほぼ等しい ↓ ㉒ 鈷部より把部が長くなる
- 6 ㉑ 把部を飾る蓮弁が素弁である ↓ ㉒ 蓮弁が単弁となる。
- 7 ㉑ 蓮弁帯を締める紐が三線である ↓ ㉒ 紐が二線となる。
- 8 ㉑ 鬼目が円形に近く、その突出が強い ↓ ㉒ 鬼目は横長楕円形が一般的となる
- 9 ㉑ 鈴身部は笠部から緩やかに広がり下方で急激に開かない（外反りしない） ↓ ㉒ 鈴身部は笠部からほぼ垂直に下がり下方で急激に開く（外反りする）
- 10 ㉑ 鈴身と柄部を一铸する ↓ ㉒ 鈴身と柄部を別铸し、柄差しして固定する。

もちろんこのような変化は、全てにわたり、同時に生じるのではなく、徐々に推移するのであり、あくまで判断の目安である。ただし製作時期を比定する上では3・4・6・7・8・9といった点は、比較的考慮すべき点と思われる。さらに中世後半期から近世になると、中鈷と脇鈷の先端が铸着（接着）する、鈷部が顕著に短くなる、蓮弁に縦筋を刻む「筋弁」が増加するなど、さらに変化が生じる。

この㉑から㉒への大凡の画期は、概ね平安時代後半期と考えられるが、基準作例が寥々たることもあって時期をさらに限定するのは難しい。また、1・10のどの変化が早く現れるかについても明らかにし難い。

鰐淵寺五鈷鈴は、このうち1㉑・2㉑・3㉑・4㉑・5㉑・6㉒・7㉒・9㉒・10㉒が該当しよう。鈷部が大きく先端が鋭利で、脇鈷が牛角を呈さない点、中鈷に匙面を取る点で古様が残り、蓮弁が単弁で約条が二本となる点、裾で開きを増す鈴身の形状などに新しい要素が



図3 金銅五鈷鈴 個人蔵

認められる。これらを勘案するなら鰐淵寺鈴の製作時期は、概ね鎌倉時代前半に比定できると思う。なお、脇鈷の開きや湾曲、鈴身の形姿などが比較的近い事例として、東京・出光美術館の金銅五鈷鈴や個人蔵の五鈷鈴が、鈴身の形姿は個人蔵の金銅五鈷鈴（図3）などに近い。

iii、細部形式・意匠の特色（諸鈴との比較において）

次に鰐淵寺鈴における細部形式の特徴を明らかにするため、先述した金剛鈴の主な分類に従って細部形式を概観する。前にも若干述べたように、現存作例の最も多くを占め、いわば金剛鈴遺品の通形とでもいべきものが鬼目式素文鈴（図4）である。総じて装飾を控えた簡素なもので、空海請来の五鈷鈴などに先蹤があり、その後、徐々に変化が加えられ、平安時代後半期にはほぼ定型化したものと思われる。金剛界種子鈴の一部にもここに属すべき遺例がある。

- ① この種の金剛鈴によく現れる特色は、

- ② 脇鉦の背に雲形や三日月形などの突起を付けない。⁽¹⁾
 - ③ 鬼目の上下に素弁または単弁の蓮弁帯を飾る。
 - ④ 蓮弁帯を素紐で締める。
 - ⑤ 鈴身側面の上方と下方に紐数条よりなる紐帯を巻く。といった点である。
- これに対し、上記鬼目鈴より遺品ははるかに僅少な鬼面式金剛鈴では、総じて細部意匠に大きな相違がある。とくに鬼面鈴の遺品では、鈴身に尊格の象徴としての「種子」や「三昧耶形」を表出するものが多く素文鈴は少ない。
- ただし同様の種子鈴や三昧耶鈴でも「胎藏界種子鈴及び金剛界種子鈴の一部」⁽²⁾と「三昧耶鈴」⁽³⁾とでは、さらに各所に小異が認められる。

① 前者の主な特色は、脇鉦の基部を獅嚙(または竜口)とする。



図4 金銅五鉦鈴 奈良国立博物館



図6 金銅三昧耶形五鉦鈴
奈良・金峰山寺



図5 金銅種子五鉦鈴
(胎藏界四仏種子) 細見美術財団

- ㊦ 脇鉦の背に雲形や三日月形などの突起を付けない。
- ㊧ 鬼面の上下に重弁の蓮弁帯を飾る。
- ㊨ 蓮弁帯を連珠文帯で締める。
- ㊩ 鈴身側面上方と下方に素紐と連珠文帯を巻き、さらに上方には独鉦杵文帯、下方には三鉦杵文帯を廻らし、この間に尊像の象徴表現を伴う。

といった点である。また、後者の三昧耶鈴の場合では、㊦、㊧、㊨の特徴においては、概ね同様であるが、

- ㊪ 脇鉦の背に雲形や三日月形を付ける。
- ㊫ 鬼面の上下に素弁または単弁の蓮弁帯を飾る。
- ㊬ 蓮弁帯を素紐で締める。

もちろん、これらの特徴がすべて鬼目鈴、鬼面鈴各々の遺品に共通して現れるわけではないが、それぞれの遺品群のもつ傾向としては提示可能であろう。とくに㊩にも挙げたように、鬼面鈴の遺品は種子鈴、三昧耶鈴に多く、中でも、胎藏界四仏種子を伴う種子鈴と金剛界四仏（または四波羅蜜菩薩）の三昧耶形を伴う三昧耶鈴のほとんどの遺品が、鬼面鈴である点は留意されるし、あわせて上記各々に挙げた小異が認められることは考慮してよい。記述が煩瑣になったが、表はこれまでの記述を基本としながら、鰐淵寺五鉦鈴と鬼目式・鬼面式、あるいは素文鈴・種子鈴・三昧耶鈴の代表的遺品と関連遺品の細部意匠を比較したものである。

鰐淵寺鈴は、まず鬼面鈴であるという顕著な特色がある。したがって脇鉦基部に獅噛形を備えるのは、鬼面鈴に類出する特色の一つとして理解できる。また鈴身側面の上下方に連珠文帯を廻らのも、やはり

鬼面鈴によく見られる特色といえる。これに対し、蓮弁は単弁を基調としこれを素紐で約す点、脇鉦の背に雲形などの装飾を付けない点で、鬼目式素文鈴の特徴も認めることができる。つまり鰐淵寺鈴は、鬼面鈴の特色を前面に出しながらも、鬼目鈴の特色をも依然として持ち合わせる、いわば折衷的な形式・意匠を示しているといえる。なお、鈴身や把部の意匠は鬼目鈴の通形を示しているながら、脇鉦の基部に獅噛を設け、背に雲形を付ける稀有な事例（図7）が茨城逢善寺に伝存する。

一方で、鬼面下方の蓮弁帯の上向き蓮弁帯を、間弁を入れた四葉の蓮弁をずらして二段に重ねて構成する、極めて独特な意匠（図8）を見せるのは、この五鉦鈴の注目すべき点で、これとほぼ同一の表現を見せるのは、わが国金剛鈴中においては、室町時代の遺品ではあるが滋賀・律院伝来の五鉦鈴（図9・図10）が管見に触れる唯一の遺品である。

律院鈴は、鈴身に金剛界五仏種子を表したもので、鰐淵寺鈴とは上記以外の点では細部意匠にかなりの相違があるが、そうした中でも鬼面の位置を中鉦の鉦面に対応させ、髪部に毛筋を刻み、眼を大きく見開く瞋怒の表情に鰐淵寺鈴と一脈通じるものを認めることができよう。ちなみに律院は、大津市坂本にある延暦寺の里坊であり、あるいは鰐淵寺鈴も含めこの種の鈴が天台系の一部に胚胎する形式を伝襲している可能性もあろうか。

いずれにしても鰐淵寺鈴は、製作年代が鎌倉時代前半期に遡り、極めて異色を示す鬼面鈴として貴重な事例と認めることができよう。

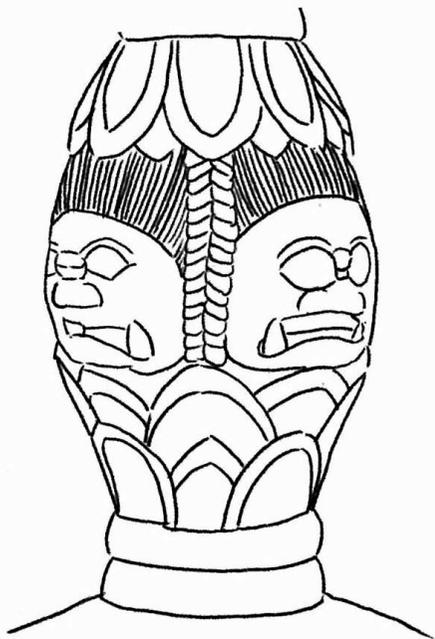


図8 蓮弁の葺き様(鰐淵寺蔵五鈷鈴)



図7 金銅五鈷鈴 茨城・逢善寺



図10 蓮弁の葺き様(律院蔵五鈷鈴)



図9 金銅種子五鈷鈴
(金剛界五仏種子) 滋賀・律院



図11-1 金銅五鈷杵 鰐淵寺



図11-2 金銅五鈷杵 鰐淵寺

二、金銅五鈷杵

鰐淵寺の金銅五鈷杵（図11）もまた細部にわたる表現に破綻のない
 精美な作例である。以下に、簡単な概要を記す。鈷部は、脇鈷が牛角
 形を呈し、下方に一段の節を作り、嘴形を備える。把の中央四方には、
 横長二重瞼鬼目を配し、その左右に間弁付単弁八葉の蓮弁帯を飾り、
 これを二線の約条で締める。弁端に
 は細かな蕊先を線刻する。

銅（青銅）製で、全体を一鑄し、
 全体を鍍金（金メッキ）仕上げとす
 るが、五鈷鈴ほどではないが、やは
 り全体に永年の使用による「手擦れ」
 が認められる。

先の五鈷鈴の制作時期を推定する
 際に用いた諸点を、この五鈷杵にも
 当てはめてみると、1㉔、2㉔、3
 ㉔、4㉔、6㉔、7㉔、8㉔が認め
 られ、したがって鎌倉時代以降の製
 作とするのが穏当と考えられる。た
 だし、本杵は、比較的大きな鈷部を
 持ち、脇鈷の横張も大きく、また鬼
 目の突出も強く、豪快な雰囲気と形
 式美をよく残した遺品といえる。鑄
 造技術も手堅く、こうした点を勘案
 すると製作は、鎌倉時代後半の早い
 時期と考えてよいのではあるまいか。

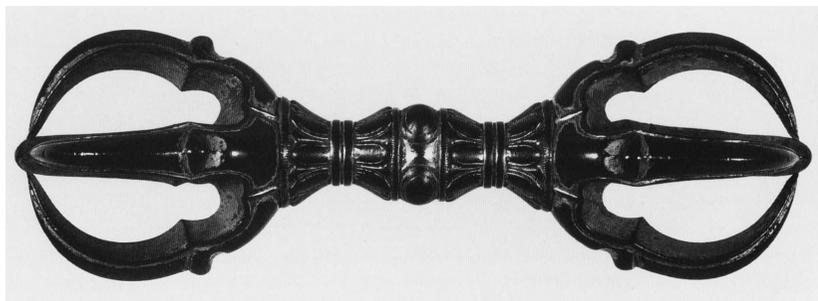


図12 金銅五鈷杵 茨城・逢善寺

茨城・逢善寺に前掲の五鈷鈴とともに伝わった金銅五鈷杵(図12)や個人蔵の金銅五鈷杵などがほぼ製作時期の近いものである。現存する五鈷杵の中でも優作に入れるべき作例と評価される。

おわりに

鰐淵寺伝存の五鈷鈴と五鈷杵について見てきたが、五鈷鈴は鬼面鈴の特徴を強く持ちながら鬼目鈴の要素も持ち合わせるもので、その形姿から鎌倉時代前半期の遺品としてよいであろう。五鈷杵は、通形の形姿であるが、よく整った形を示しており、鎌倉時代半ば頃の製作と目される。これらの法具類の伝来についてはもとより定かでないが、一縷の可能性を取って述べれば、天福年中(一二三三~五四)の火災¹⁶⁾後、再び被災する嘉暦元年(一二三六)までの間ということになる。が、いずれにせよ両遺品とも有力な鑄物師の作であることは大過ない。

注

- (1) 佐和隆研編『密教事典』(法蔵館、昭和五〇年)
- (2) 密教法具についての総括的な研究としては、奈良国立博物館監修『密教法具』(講談社、昭和四〇年)があり、その後、同書の復刻とその後の資料を増補した『増補 密教法具』(臨川書店、平成五年)がある。
- (3) 空海『御请来目録』所謂金剛等者並皆佛之智法之門。受持頂戴福利無極。外摧滅魔軍内以調伏煩惱。觀智之端自茲而起。〔大正蔵〕一五五、一〇六四c)
- (4) たとえば善無畏訳『慈氏菩薩略修念誦法』卷上「(武十我)(身十耽)囉二合者或金銀熟銅寶鐵白檀木紫檀木等。五金鑄。或五股四股三股二股獨股等。」「〔大正蔵〕二一〇、五九八c)とあるなど、金剛杵に「四鈷」や「二鈷」も説くが、現存する遺品はない。注(2)参照。

鰐淵寺の密教法具について(関根俊一)

- (5) 遺品に即するなら、胎藏界種子鈴の場合、種子はほとんどが大日如来を除く四仏で、大日如来の当体を鈴身自体に見立てるのである。
- (6) 古様な遺品ほど素弁のものが多く、時代が降ると単弁となる傾向がある。ここでいう素弁とは、無子葉の蓮弁をいい、単弁は子葉を重ねる(二枚重ねに見える蓮弁)、重弁は子葉を併いさらに蓮弁を二枚重ねる(三枚重ねに見える蓮弁)ものをいう。なお、鬼目については、古いものほど円形で大形、しかも突出も強いが、やはり時代が降ると横長の楕円形となる傾向がある。
- (7) ここでいう、「素紐」とは、縄目などを入れない無文の紐をいう。
- (8) 筆者は「平安・鎌倉時代の金剛杵——密教法具の細部形式・意匠に関する基礎的研究 その一」(『日本文化史研究』三二号、平成二二年)において、便宜的に概ねa群の特色を示す遺品のピークが平安後期にあるところから「平安形式」、b群の遺品群のピークが鎌倉時代後半にあるとして「鎌倉形式」として分類したことがある。大治五年(一一三〇)の製作と考えられる那智経塚出土の五鈷鈴では、すでに蓮弁帯を二本の紐で締めるから、ここに掲げた変化のうち早いものは、十二世紀前半には萌芽すると思われる。
- (9) 出光美術館蔵は、注(2)『増補 密教法具』(作品番号30)では、平安から鎌倉期の過渡期的な作例とされる。個人像の五鈷鈴は、同『密教法具』(作品番号68)で平安後期の製作とされる。
- (10) 注(2)『密教法具』(作品番号73)では、平安後期の製作とされるが、私見では過渡期的な作例と思われる。
- (11) これを形状から「雲形」、「三日月形」と呼び、「三日月形」のものは「金剛牙」ともいう。注(2)書参照。
- (12) 岡崎讓治「種子鈴考—金剛界鈴と胎藏界鈴—」(『仏教芸術』七一号、昭和四三年)では、現存遺品の克明な分析をもとに、金剛界種子鈴は本来、鬼目鈴に通形の簡素な形式を採っていたが、しだいに一部で胎藏界種子鈴の形式・意匠の影響を受けた作例が製作されるようになると説く。蓋

し、正鵠を得ているものと思う。

- (13) 鈴身の側面にシンボルをものには、大別して「仏像鈴」、「種子鈴」、「三昧耶鈴」がある。「仏像鈴」は、鈴身に四天王、梵天・帝釈天、明王（五大明王等）を表すもので、現存遺品の大半は中国・朝鮮半島製とされる。「種子鈴」は、金剛界や胎藏界の五仏（四仏）の種子を表出したもので、やはり金剛界や胎藏界の諸仏を三昧耶形（器物）で表した「三昧耶鈴」とともにシンボルによる尊格表現をもつところに特色があるが、仏像鈴と異なり、これらの現存遺例はいずれも日本製である。この他、鈴身側面にシンボルを伴うものではないが、独鈷鈴、三鈷鈴、五鈷鈴、宝珠鈴、宝塔鈴の五鈴（五種鈴）を一具でつくり、密教五仏に準えることがあり、これも広義には金剛鈴が尊像を象徴する場合に相当するであろう。この種の鈴について筆者は、「仏像表現のある金剛鈴」（梵天・帝釈天）日本の美術三七四号、至文堂、平成九年所収）、「尊像を鑄出する金剛鈴の諸特徴―四天王鈴と梵釈四天王鈴―」（美術史）一三〇号、平成二年）、「三昧耶形を表した金剛鈴」（日本文化史研究）一九号、平成一九年）、「五種鈴小考」（仏教芸術）一九四号、平成三年）などで述べたことがある。また種子鈴に関しては、注（11）岡崎論文が詳しい。

- (14) ただし、律院鈴は私見によれば、鈴杵が本来的に一具であったかは検討を要しよう。なお金峰山寺の五鈷三昧耶鈴は、この部分を、通形の蓮弁帯を葺いた上に、紐で括った小蓮弁を四方にのぞかせるといふ、やはり特殊な意匠を見せる（図14）。

- (15) 逢善寺五鈷杵は注（9）書の、作品番号119に掲げられ、鎌倉初期の作例とされる。個人像の五鈷鈴は（同作品番号122）は鎌倉前半期の製作とされる。

- (16) 『出雲国 浮浪山鰐淵寺』（浮浪山鰐淵寺、平成九年）五〇～五一頁。

【付記】

本稿は、平成二二年度科学研究費補助金（基盤研究B）「出雲鰐淵寺の歴史・総合的研究―日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために―」



図13 蓮弁の葺き様（金峯山寺蔵五鈷鈴）

（研究代表者 井上寛司島根大学名誉教授）における研究成果の一部である。調査に当たっては、鰐淵寺、島根県立出雲文化博物館 をはじめ多くの方々の御協力を得た。ここに記して深甚の謝意を表す次第である。

表 金剛鈴の細部形式・意匠

種類	名称(所蔵)	製作年代	鈴部		把部			鈴身部		備考
			脇鈴の背	脇鈴の基部	蓮弁帯	約条	中央	鈴身の装飾	紐帯間	
素文鈴	五鈴鈴(鰐淵寺)【図1】	鎌倉	無	獅嚙	単弁①	2線	鬼面	上・下方に連珠文帯	無	
素文鈴	五鈴鈴(奈良国立博物館)【図4】	平安	無	嘴形	単弁	3線	鬼目	上・下方に紐帯	無	
三昧耶鈴	五鈴鈴(金峯山寺)【図6】	平安	三日月形	獅嚙	素弁②	2線	鬼面	上方に連珠文帯、下方に連珠文帯と三鈴杵文帯	四方に三昧耶形	金剛界四仏(または四波羅蜜菩薩)三昧耶形
種子鈴	五鈴鈴(細見美術館)【図5】	鎌倉	無	獅嚙	重弁	連珠文帯	鬼面	上方に独鈴杵文帯と連珠文帯、下方に連珠文帯と三鈴杵文帯	四方に種子	胎藏界四仏種子
種子鈴	五鈴鈴(奈良国立博物館)③	鎌倉	無	嘴形	単弁	2線	鬼目	上・下方に紐帯	五方に種子	金剛界五仏種子、遺品僅少
種子鈴	五鈴鈴(律院)【図9】	室町	雲形	獅嚙	単弁	縄目2線	鬼面	上・下方に連珠文帯	五方に種子	金剛界五仏種子、本品のみ

注①下方の蓮弁帯は上半のみ蓮弁を二重とする

②下方の蓮弁は小蓮弁を挟む

③注(2)『密教法具』作品番号17